



同志社人物誌 (38)

八 浜 徳 三 郎

小 倉 襄 二

底辺にむかう志

私たちが同志社の一〇〇年を憶うときに、そのさまざまな軌跡のなかで、とくに深くきざみこまれてきたものとして、底辺にむかう志に触発されてその生を綴っていた人々の脈流をみい出すことができる。人文研キリスト教社会問題研究(C・S)で共同研究をおこなっている留岡幸助をはじめとして、山室軍平、水崎基一、大塚素、牧野虎次らの系統、それらの先人につづく幾多の慈善

・感化救済事業(明治期)、社会事業(大正―昭和期)、さらに現在の社会福祉の時代に働いた「同志社派」ともいふべき人々の底辺にむかう志にかかわる実践があった。

八浜徳三郎も、この同志社の軌跡に、その位置をくつきりと刻みこんだ人物の一人である。一八七一年(明治四)に岡山県笠岡に生まれた。留岡・山室も周知のごとく岡山県に生を享けている。キリスト教に入信、一八九一年(明治二四)、同志社に入學し神学を學んだ。

一八九六年(明治二九)神学科別科を卒業して、一九〇四年(明治三七)より一九一二年(明治四四)の間は、主として、大阪、神戸において伝道に従事した。この伝道において、八浜徳三郎は、とくに底辺の生活者、そのなかでも、差別と屈辱にまみれた人々のつどう監獄、細民窟、木賃宿、さらに工場などを歴訪したといわれる。こうした実践が彼の社会事業への関心を強いものにしたことは当然である。わが国の資本制の発展は、相対的過剩人口を「下層社会」のかたちとして分厚く、多様な存在形態においてうみだした。そうした生活者は、都市底辺などに沈滞し、慘澹たる窮迫にあえいだ。このあたりのドキュメントをみると、この貧しさにおいつめられたなかでの隣保相扶や親族相救という「人民ノ情誼」として権力者が民衆に対して「訓示」する貧しさを支えるしくみの中で、やむなくその生をいとなむ外なかった。八浜徳三郎の視たものは、さらに酷烈であった。そうした底辺にあえぐ人々をさらに食いのにし、あざむき、いためつけて、利益をむさぼりとする寄生虫のような人間の行為である。八浜徳三郎の社会的実践の主な領域は職業紹介事業で

あるが、彼が情熱をかたむけてとりくんだこの仕事にむかう動機や必然性は、この六、七年余の伝道のなかで視た現実から発現したものにはちがいない。一九〇八年(明治四一)以後、神戸において伝道中に、英国において国立職業紹介法の公布とその実施のを知り、わが国の状況から考えて、その必要性をとくに強調した。さらに傷病、貧困、とくに失業

によって苦しむ人々を救うことがキリスト教の本旨にかなうものと考えて、伝道のかたわら人事相談、および職業紹介の事業を開始。八浜は、これらの事業をすすめるなかで、つ

いにその生涯を専心この事業に捧げることとを決定して、教会をも辞したといわれる。一九一一年(明治四四)、内務省が全国的に細民調査を実施するにあたって、その囑託となつてい

る。同時期において、禁酒運動でも著名であった青木庄蔵が、財団法人大阪職業紹介所を民間人の協力を得て開設されるに際して、その常任指導者として働くこととなつた。付設の労働共助館の経営にも責任を分担した。さらに、八浜は、大正職業紹介所、財団法人少年ホームなどの創設にもかかわり、大阪地方における職業紹介事業の中枢には八浜の働き

があり、斯業で彼の関与しない部分はないとさえいわれた。生江孝之によれば、昭和初年で大阪職業紹介所設立らしい、就職人員約一〇万人、共助館などの宿泊救護三万六〇〇〇人の多きに達したという。これは、無宿者、浮浪者救護事業として、大阪労働共助館の経営をその館長としてキリスト教主義のもとにおこなつたことの実績である。

このような実践のなかで、八浜徳三郎は、評論、言論のうえでも職業紹介事業の在り方について、先駆的、開拓的な発言をおこなつている。一九二〇年(大正九)に『下層社会研究』を発刊している。これは、八浜が、大正初年から米騒動のあつた一九一八年(大正七)にいたる間に、雑誌(主として大正二年八月発刊・大阪における救済事業研究会の「救済研究」に収録されたものが多い)や新聞にのせたものを一冊としたものである。八浜は、その発刊の辞に「本書は往年著者が内務省細民調査囑託として、東京の下層社会を調査し、而して多年躬ら社会事業に従事し、親しく下層社会階級の人々に接触して得たる実験と資料とに拠りて論述したるものにして、彼の学者が万巻の書を渉猟し、静かに詞藻を練磨して著述したものとは

自ら其の選を異にするが故に、敢て論旨の前後を求むること能わざるも、実験の事実に迂遠ならざらんことは聊か微力を竭せる所也」とのべている。本書は、十章にわかれて、高利貸、質屋、公設質屋、桂庵、公設桂庵、木賃宿、貧民窟、職工、淫売婦、不良少年などを記述内容としている。この『下層社会研究』は、横山源之助の『日本之下層社会』(明三二)が産業資本確立期の「細民」「貧民」「窮民」の詳細をきわめたルポルターージュであつたのに比較できる内容をもつものといえよう。

ここでは、「救済研究」第一巻・四号(大正二年十一月発行)に「社会研究」^四大阪の桂庵という研究論文に沿つて八浜の考え方、現実認識の一端をみてみたい。まず、実証的に統計資料によつて人口動態、とくに、出稼ぎや入寄留者の状況、移動のはげしきの指摘にはじまる。大阪を去るもの一人あらば、之に代りて来るもの五人あるの勘定なり」といつている。大正元年には、市内の僕婢紹介業者一五九、芸妓紹介業者一七一、入方專業者三八、船員紹介業者二二、身許保証・告知業者一七、合計四〇七という。それぞれの扱う

対象者、口入れにとまらう紹介の仕方には差異があつても、こうした求職者に寄生する業者の口はきわめて悪辣であり、雇人を周旋して、其の手数料を徴収した後、直ちに其雇人を誘い出して、他家へ紹介し、再三その手数料を取り立てるようなこともする。とくに、芸妓紹介については、前借金からむ人身売買、拘束による強制売春のしくみとむすびついて、悲惨の度をつよめてくる。「ニダシ」（人出し）と称する芸妓、仲居、酌人希望の女を紹介業者のもとへ連れて来る老婆などをいう。このやりくちにはじまつて、この紹介業者の前身には、遊廓の男衆、妓、刑事、巡査、桂庵の雇人などが多く、その手数料は前借金の一割であるから一ヶ月に一人二人の玉（芸妓希望者）があれば優に生活をいとむことができるという。さらに敷衍えと称して、足ヌキ、玉コログASHと住みかえを巧みにおこなつて、手数料をかせぐといったやり方も彼らの常套手段であることを八浜はくわしく指摘している。たとえば、娼妓で前借金五〇〇円とすると、紹介業者から手数料、衣服損料、書賃として七〇円を引かれ、棲主よりは、衣服、タンスなどの支度料とし

て一〇〇円を引かれて、実際に親などの手に渡る金は三五〇円にすぎない。この金で三年―五年の年季奉公で、廓の拘禁のもとに売春を強要される。稼ぎは四分六分、棲主四分、娼妓六分であるが、たくみに娼妓のかせぎ分を棲主が喰ひあげる制度となつていて、病氣、事故もからんで、借金がかさみ、生活の破滅にいたることを詳述している。「下層社会研究」では、労働下宿についても論及しており、資本主義の構造変化―重工業への傾斜のなかで、工場、土木請負師と結託して所要の労働者を供給している。宿料は一日二十八銭―三十五銭、食料、その他の取扱金について五歩―一割の利息をとる。十五日以内で退宿するものには一割増の宿料をとる。はじめに手数料として五十銭をとり、のち毎日、賃銀の五歩―一割をピンハネ、故に労働者は如何に勤儉するも鏝銭一文も貯蓄すること能わざるなり、という有様であった。この断片的な指摘のなかにも、労働力市場、働く貧民にむかつて、寄生し収奪するためにけりめぐらされた営利的職業紹介の「アミ」の目、それを断つことが八浜徳三郎の希求であつた。八浜は、「労働の需要と供給の平均を失

わんか、忽ち世を挙げて飢餓の惨境に陥らしむ」と考え、この状態を放置するならば、「彼等は自暴の極に馳せ、浮浪無頼の徒と化して、社会に危害を加うるに至らん。然らば之が救済方法果して如何、予が謂ゆる職業紹介の必要茲にあり」と主張した。八浜の職業紹介の定義は「自己の努力若しくは知力をひさがん事を欲する人々に対し、其の努力又は知力に対する需要の存する所を知らしむる行為一切を云う」とのべ、営利的紹介制度、雇主又は労働組合による紹介制度、慈善団体、公共団体、国家の設立による紹介制度の三種類の別をおこない、本書では、この歴史、ヨーロッパの事情、日本の状況についても詳細な説明がなされている。一九二〇年（大正一〇）に「職業紹介法」が公布されるが、八浜の主張や実践が、営利的職業紹介の弊害除去へとうごくうえでの貢献はきわめて大きい。大阪地方職業紹介委員、大阪府失業防止委員などの役割のなかで、八浜の努力は継続されると、その背後にうごいてはいるキリスト教の信仰による小さき最後のものへの愛による実践が、彼のなかで社会正義への訴えとして動い

ていたように思われる。

八浜徳三郎の希求としての職業紹介の領域は、「職業安定法」をはじめ、今日では、労働行政——労働基本権の主題として展開している。しかし、大正期にあつては、社会事業、とくに経済保護事業の領域として扱われていた。明治三〇年代以降の急速な賃労働の蓄積と厚生の労働関係のしくみのなかで、八浜の視たものは、未分化な「下層社会」の多様な生活者が追いつめられ、不当な収奪に防禦の手段もなくさらされている姿であつた。

その焦点を職業紹介にしほつて、そこに、底辺への志をつないだのが八浜の卓見でもあり、民間人として経済保護事業のなかの職業紹介の開拓者、先駆者となつた八浜の鋭い人権感覚ともいうべきものが息づいている。

「福祉」というコトバがいたずらに氾濫し、内実の空洞化する時代に、私たちは、「福祉」の思想や制度形成の歴史にたちかえつて考えることが多くなつた。同志社一〇〇年の学統のなかにも、この主題にかかわる事柄が新しい視点からの検討をもとめている。八浜徳三郎の業績についても、そうした今日の時代がもとめているものの視野にくっきりと入つて

くるものであるし、今後においても、資料の発掘や事業の展開のあとづけによって確認す

べき課題を秘めた人物といえよう。

(大学文学部教授・社会問題)

同志社関係出版物

新島 襄 (岡本清一著)	同志社大学出版部	¥ 500
新島 襄 (魚木忠一著)	〃	¥ 300
髪 の 掠奪 (岩崎泰男訳)	〃	¥ 1,000
ミルトン研究 (越智文雄著)	〃	¥ 1,400
同志社設立の始末 (新島 襄) 同志社大学設立の旨意	学校法人同志社	¥ 100
同志社90年小史 (同志社々史々料編集所編)	〃	¥ 3,000
新島襄書簡集 (編者代表・住谷悦治)	岩 波 書 店	¥ 210
同志社大学—大学シリーズ (奥村芳太郎編)	毎 日 新 聞 社	¥ 1,000
新島 襄 (和田洋一)	日本基督教団出版局	¥ 1,000
イエスの生涯と思想 (高橋 虔)	教 文 館	¥ 350
憲法と平和 (田畑 忍)	〃	¥ 350
人生、友情、学問 (上野直蔵)	〃	¥ 350
日本経済の源流 (住谷悦治)	〃	¥ 350
近代日本文化キリスト教 (高道 基) 辻橋三郎	〃	¥ 350

取扱・同志社収益事業課